

八反切遺跡 II

—工場建設用地造成工事に伴う発掘調査報告—



平成21年3月

彦根市教育委員会

目 次

例言

Iはじめに	1
II位置と環境	1
III調査の成果	5
基本土層	5
検出遺構	5
出土遺物	16
IVおわりに	22
写真図版	

例 言

- 本書は、彦根市教育委員会が平成19年度に工場建設用地造成工事に伴って実施した発掘調査の成果を収めたものである。
- 本調査の調査地は、彦根市野田山町字八反切746-1外に位置する。
- 本調査は、現地調査を平成20年1月7日～平成20年3月10日の間実施し、のちに整理調査を行った。
- 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

文化財部長：西川太平	文化財部次長：寺崎 熟
課 長：谷口 徹	課 長補（歴史跡整備係長）：久保達彦
係 長：広瀬清隆	主 壱：志賀昌貴
副 主 壱：北川恭子	主 任：池田隼人
主 任：高木繪美	主 任：林 昭男
技 術 師：大岡由記子	技 術 師：三尾次郎
- 本調査には以下の諸氏が参加した。
片山正範・清水啓邦・辻 節夫・西村朝男・浜野 熟・原 光男・藤原輝雄
- 本書は大岡由記子が執筆した。
- 本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
- 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

I はじめに

彦根市野田山町字八反切746-1外で工場用地造成工事が計画された。当該地は八反切遺跡の範囲内に位置していることから埋蔵文化財発掘届が提出された。平成17年度には隣接地で本発掘調査が行われたこともあり、遺構の存在とその広がりを把握するため、平成19年12月17日、18日に開発予定地5,549m²全体を対象として試掘調査を実施した。その結果、2m×2mの試掘坑を27箇所設けたうち、11箇所から遺構と遺物が確認された。そのため開発業者と協議を行い、11箇所を中心とした開発区域の北西部分と東側の一部で本発掘調査を行う事となった。本調査は平成20年1月7日に開始し、同年3月10日に終了した。

今回の調査にあたっては開発業者をはじめとする関係者にご理解とご協力を賜り、重機の手配などにおいてもご尽力を願った。厚くお礼を申し上げたい。

II 位置と環境

〔地理的環境〕

鈴鹿山脈北端の靈仙山ならびに高室山の東南麓に端を発する芹川は、同じく鈴鹿山脈の三國岳西麓に端を発する大上川とともに山間部では急折を繰り返す渓流を形成し、山間部を抜けると山裾部に河岸段丘を形成しながら扇状地となる。下流域では緩傾斜部を流れることで堆積作用が増幅し、沖積地である湖東平野を形成する。この地は鈴鹿山脈を越えると三重へ抜け、平野部の中山道、北国街道から東国や北陸へと通じることができる交通の分岐点であった。八反切遺跡は芹川によって形成された扇状地山裾部の河岸段丘上に位置する、古墳時代から奈良時代の遺跡である。

〔歴史的環境〕

この芹川右岸の河岸段丘上には八反切遺跡をはじめ、竹ヶ下遺跡、木曾遺跡、久徳城跡、久徳遺跡が並ぶように位置している。木曾遺跡からは縄文時代中期の土器片が、久徳遺跡からは晩期の壺棺墓が出土しており、縄文時代からこの地で人々の営みがあったことが確認される。縄文時代晚期から弥生時代前期の遺跡は土田遺跡や福満遺跡など、特に沖積平野内で確認されているが、弥生時代中期の遺跡は殆ど確認されていない。この地の開発が再度盛んになるのは古墳時代に入ってからで、木曾遺跡では前期の竪穴住居がまとまって確認され、小型仿製鏡やS字状口縁台付甕の破片が出土している。八反切遺跡の既往の調査でも不定形の土坑が11基検出されている。中期には木曾遺跡で円筒埴輪片が出土しており、古墳の存在が推測される。

古墳時代後期には周辺で木曾古墳や正法寺古墳群などの後期古墳が築造され、木曾遺跡でも木棺墓、土壙墓、横穴式石室墳が、八反切遺跡の既往の調査でも6世紀末の木棺墓が検出されている。墓域として土地利用されるほか、6世紀後半から7世紀前半には木曾遺跡では

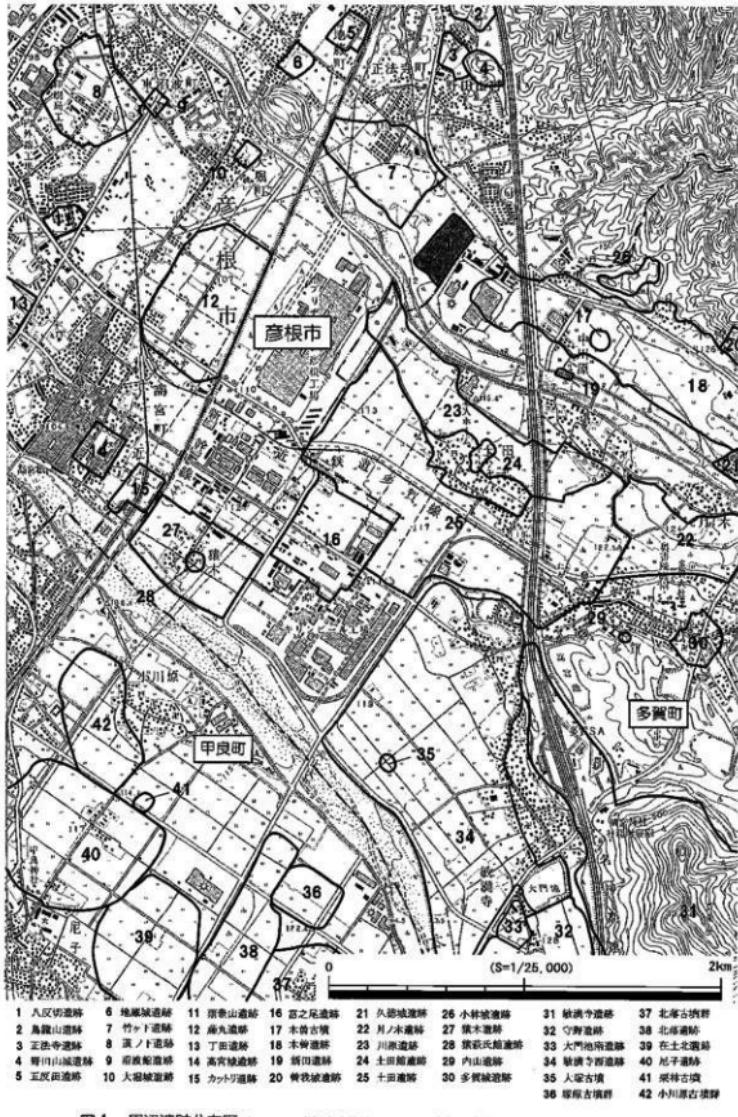


図1 周辺遺跡分布図 (1~16: 莺根市内遺跡、17~35: 多賀町内遺跡、36~42: 甲良町内遺跡)

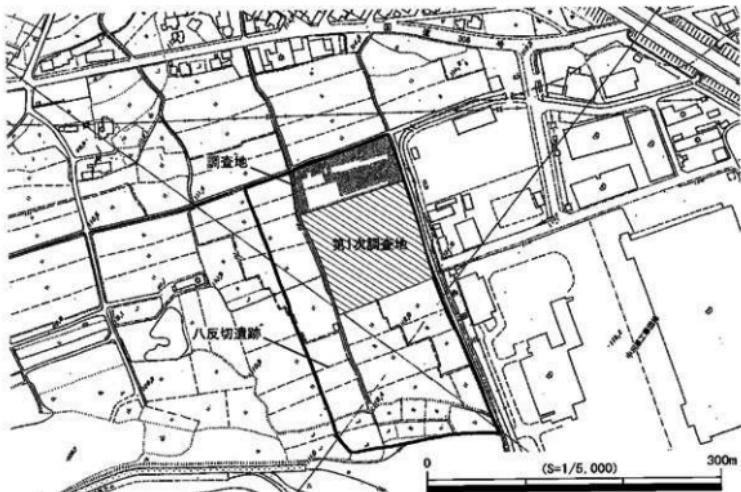


図2 調査地・トレンチ設定図

大型造建物が2棟検出されており、この地が集落域としても利用されたことが推測される。これにあたっては渡来系集団の関与が推測される。また犬上川流域にも葛籠北遺跡や小川原遺跡、塚原古墳群、北落古墳群などの群集墳や集落が営まれる。

7世紀後半以降、木曾遺跡では掘立柱建物や竪穴住居が並存しており、竪穴住居からはフイゴ羽口、焼土が出土しており小鋸治が行われていたことが確認されている。8世紀後半からは掘立柱建物が主流となり、墨書き土器や円面鏡などが出土している。八反切遺跡の既往の調査でも掘立柱建物が9棟検出されており、芹川右岸の河岸段丘上の遺跡の全てで当該時期の造構が確認され、盛行していたことが推測される。一方、芹川左岸下流でも藤丸遺跡や土田遺跡、遊行塚遺跡（高宮廃寺跡）や竹ヶ鼻廃寺遺跡など奈良時代の集落や寺院、官衙的な性格を持つ遺跡が確認され、芹川と犬上川に挟まれた肥沃な土地に集落や寺院が点在したものと推測される。また八反切遺跡の北1kmのところには瓦陶兼業窯である鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）が位置しており、瓦はこうした建物に供給されたものと推測される。

今回の調査地は前回調査の隣地に位置することからも、調査前から前回同様の掘立柱建物の存在が推測された。以下に調査成果をみていくこととする。

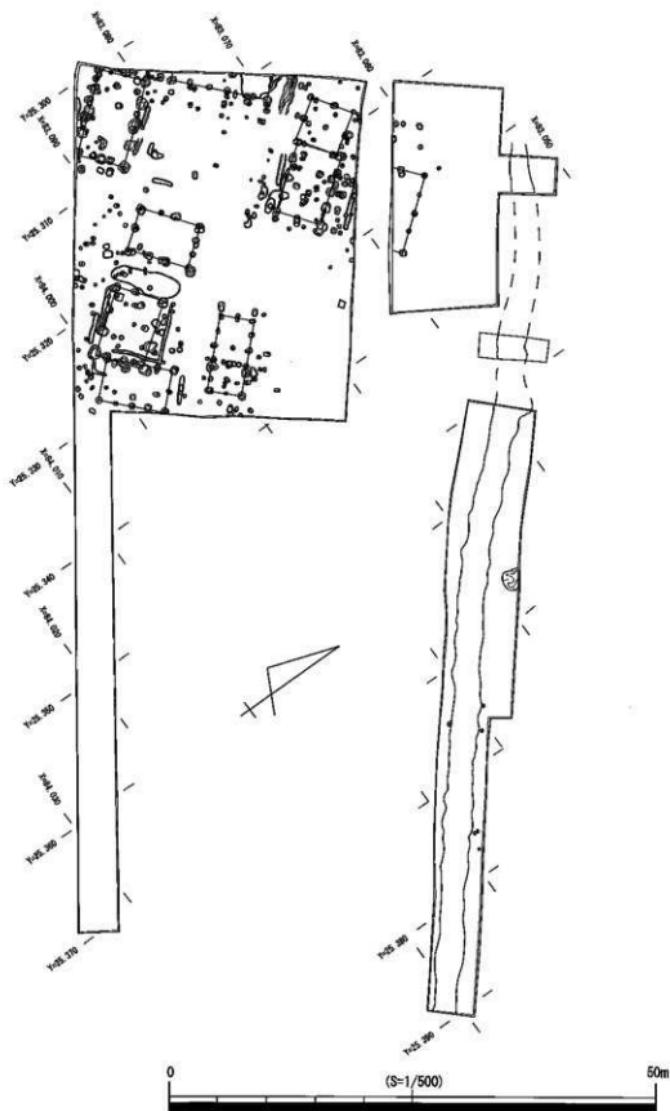


図3 八反切遺跡第2次調査検出遺構全体図

III 調査の成果

基本土層

基本的な土の堆積状況は①耕作土、床土②黒茶褐色細砂粘質土（マンガン含）、③暗茶褐色細砂粘質土、明茶褐色細砂粘質土であるが、調査区東側では①直下の②、③層に子どものこぶし大程の礫が多く含まれており、北西側へ行くほど礫がなくなり、②、③が安定して堆積する状況であった。②は遺物を含む包含層であり、③の上面で溝、ピットなどの遺構が確認された。

現況地形は標高約111.5mの水田で緩やかに芹川の下流方向、北西方向へと下がっている。遺構面も同様の傾向が確認でき、調査区南東端では耕作土から遺構面までの深さが42cmであるが、北西端では85cmを測る状況であった。

検出遺構

今回の調査ではピット355基、溝13条、落ち込み状遺構2基、火葬墓1基を検出した。ここでは掘立柱建物などの主要な遺構を中心に概略を報告する。

〔古墳時代前期の遺構〕

SD 6（図4）

東南方向から西北方向へと伸びる溝で、検出長92m、幅1.6～3.8m、深さは遺構検出面から52cm～90cmを測る。西北方向で幅狭になる。緩やかに直線的に伸びる。最深部は溝中央にあり、断面形態は緩やかなV字状を呈す。埋土は砂礫を多く含む。溝底部で布留式の甕と高壙の破片が出土したことから、古墳時代前期に所属すると考えられる。

〔奈良時代以降の遺構〕

火葬墓（図5）

短辺60cm、長辺73cm、深さは遺構検出面から21cmを測り、ほぼ立方体を呈す。内面は赤く焼けており、埋土は炭と赤褐色の焼土が充填された状態であったことから火葬墓と考えられる。遺物は出土していないため、明確な所属時期は不明であるが、奈良時代以降と考えられる。

掘立柱建物（図5 SB1～9）

掘立柱建物は9棟確認された。掘立柱建物を構成する柱穴は柱痕が確認できないものが多い。また平面形態が不定形で、掘り方に該当する部分に中段を持つ柱穴は、建物廃絶後に柱の抜き取りを行った可能性が考えられる。いずれも埋土は概ね上層が灰黄褐色粘質土細砂

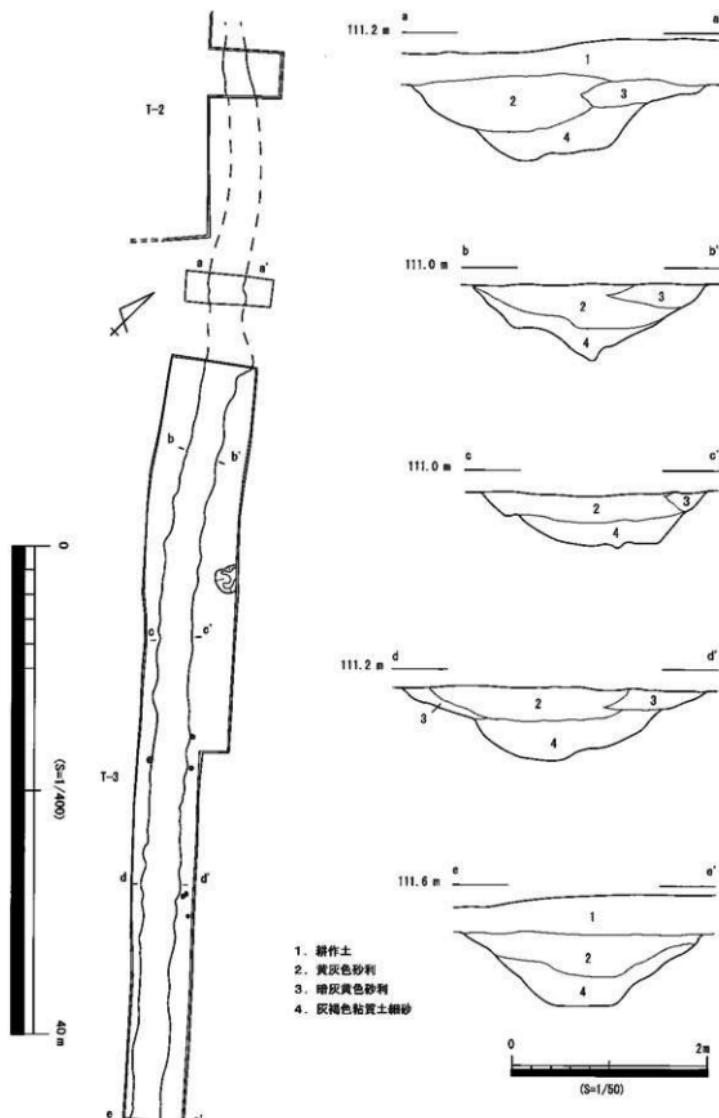


图 4 SD 6 平面图·断面图



図5 据立柱建物検出平面図

で、下層が褐色粘質土細砂である。確認できた柱痕の埋土は暗灰黄色粘質土細砂で、水分を多く含む。

SB 1 (図6)

一部調査区によって切られるが、桁行1間($a - a' 4.8m$ 、 $c - c' 4.92m$)、梁行4間($b - b' 8.75m$ 、 $d - d' 9.18m$)の建物である。柱間は $b - b'$ で $2.0 \sim 2.32m$ 、 $d - d'$ で $2.08 \sim 2.48m$ を測る。掘り方の平面形態は隅丸方形(SP12、SP26、SP29、SP30)、楕円形及び不定形で、隅丸方形は一辺 $0.88 \sim 1.04m$ 、その他は長軸 $1.2 \sim 1.68m$ を測る。柱の痕跡はSP12で直径24cm、SP30で直径28cmを測る。建物の主軸はN-32°-Wである。SB1を構成するピットからは土師器壺(13)、甕、須恵器壺蓋(1~5、7)、壺身(6、8~11)、甕、器台(12)、壺などの破片、土師質の土錐(14、15)が出土しているほか、混入と思われる縄文時代の叩石(69)が出土している。

SB 2 (図7)

建物の半分が調査区外に伸びる。桁行1間以上($a - a' 2.32m$ 以上)、梁行5間($b - b' 11.8m$)の建物である。柱間は $b - b'$ で $1.8 \sim 2.08m$ を測る。掘り方の平面形態は楕円形及び不定形(SP40)で、前者は長軸 $0.32 \sim 0.88m$ 、後者は長軸 $1.12m$ を測る。柱の痕跡はSP15、SP32、SP34、SP40で確認され、直径 $12 \sim 20cm$ を測る。建物の主軸はN-57°-Eである。SB2を構成するピットからは土師器皿(16)、甕、須恵器壺蓋(17)、壺身(18)、甕などの破片が出土している。

SB 3 (図8)

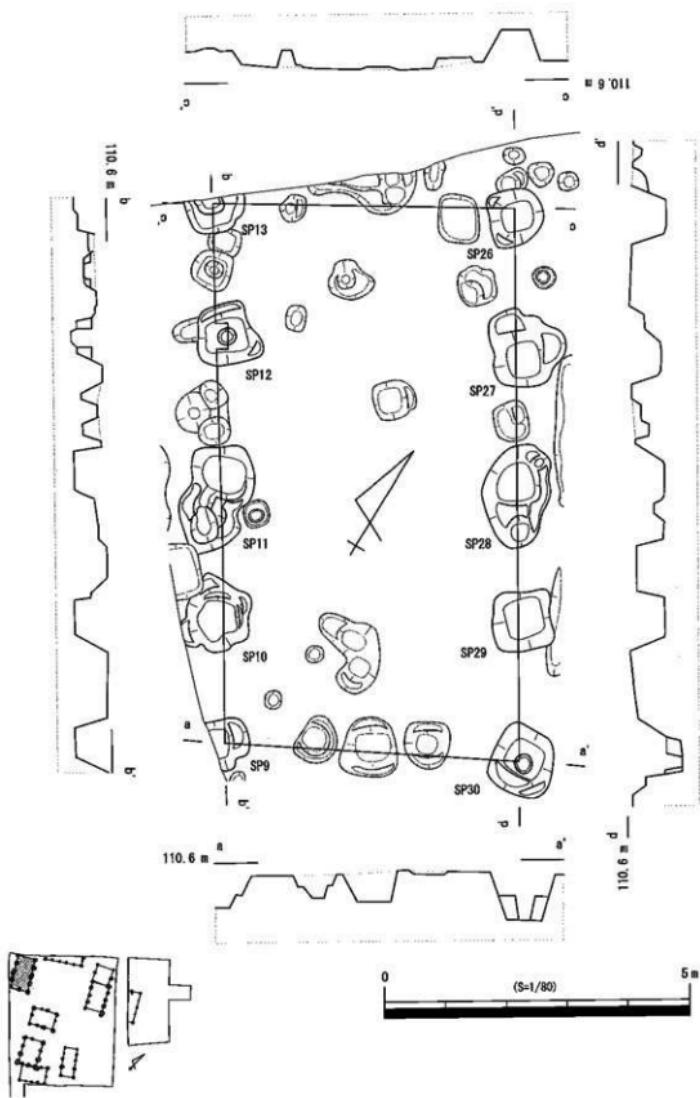
桁行1間($a - a'$ 、 $c - c'$ ともに $4.24m$)、梁行2間($b - b' 4.48m$ 、 $d - d' 4.36m$)の建物である。柱間は $b - b'$ で 2.16 、 $2.32m$ 、 $d - d'$ で 2.36 、 $2.0m$ を測る。一部SB4と重複する。掘り方の平面形態は楕円形で、直軸 $0.48 \sim 1.04m$ を測る。柱の痕跡はSP41、SP42で確認され、ともに直径24cmを測る。建物の主軸はN-35°-Wである。SB3を構成するピットからは須恵器壺蓋(19、20)、壺身、高壺、壺、甕、土師器壺、甕などの破片が出土している。

SB 4 (図9)

桁行1間($a - a'$ 、 $c - c'$ ともに $4.48m$)、梁行4間($b - b' 7.16m$ 、 $d - d' 7.12m$)の建物である。柱間は $b - b'$ で $1.6 \sim 1.96m$ 、 $d - d'$ で $1.48 \sim 2.0m$ を測る。一部SB3と重複する。掘り方の平面形態は楕円形及び不定形(SP51)で、前者は長軸 $0.68 \sim 0.96m$ を測り、後者は長軸 $1.52m$ を測る。柱の痕跡はSP18、SP20、SP45で確認され、いずれも24cmを測る。建物の主軸はN-29°-Wである。SB4を構成するピットからは土師器椀(21)、壺(23、24)、皿(25)、高壺、甕(22)、須恵器壺蓋(26~28)、壺身(29、30)、壺(31)、甕などの破片が出土している。

SB 5 (図10)

桁行1間($a - a'$ 、 $c - c'$ ともに $3.36m$)、梁行4間($b - b' 7.6m$ 、 $d - d' 7.44$ の建



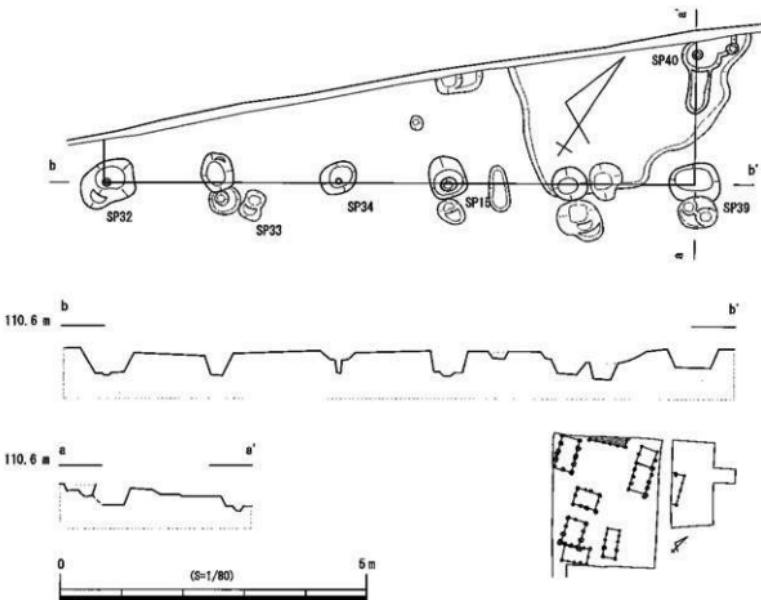


図7 SB 2 平面図・断面図

物である。柱間は $b - b'$ で 1.44~2.56m、 $d - d'$ で 1.6~2.32m を測る。掘り方の平面形態は梢円形及び不定形で、前者は長軸 0.6~1.04m、後者は長軸 1.04m を測る。柱の痕跡は確認されなかった。建物の主軸は N-36°-W である。SB 5 を構成するピットからは土師器壺、須恵器壺などの破片、土師質の土錐 (32) が出土している。

SB 6 (図11)

建物の一部が調査区によって切られる。桁行 1 間 ($a - a' 4.16m, c - c' 4.24m$)、梁行 4 間 ($b - b' 6.52m, d - d' 6.36m$) の建物である。柱間は $b - b'$ で 1.24~2.08m、 $d - d'$ で 1.52~1.68m を測る。掘り方の平面形態は隅丸方形 (SP92、SP100~102)、梢円形及び不定形で前者は一辺 0.56~0.88m、その他は長軸 0.4~1.2m を測る。柱の痕跡は SP 92、SP100 で確認され、前者は直径 16cm、後者は 32cm を測る。建物の主軸は N-56°-E である。SB 6 を構成するピットからは須恵器壺蓋 (33~35)、壺身などの破片、土師器の細片が出土している。

SB 7 (図12)

桁行 2 間 ($a - a' 4.72m, c - c' 4.88m$)、梁行 3 間 ($b - b' 6.96m, d - d' 7.04m$)

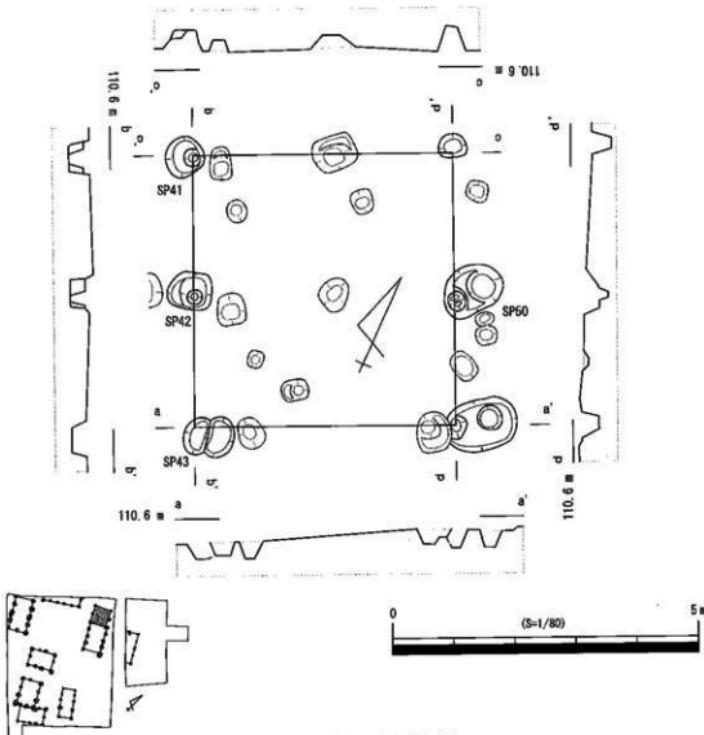


図8 SB 3 平面図・断面図

の建物である。柱間は $a - a'$ 2.0m、2.72m、 $c - c'$ 2.08m、2.8m、 $b - b'$ で2.32m、 $d - d'$ で2.32~2.4mを測る。掘り方の平面形態は隅丸方形 (SP103) と楕円形で、前者は一辺0.6mを測り、後者は長軸0.8~1.44mを測る。柱の痕跡はSP86、SP103で確認され、ともに直径28cmを測る。建物の主軸はN-27°-Wである。SB 7を構成するピットからは土師器壺(36)、甕、須恵器壺蓋(37、40)、壺身(38、39)、灰釉陶器碗(41)などの破片が出土している。

SB 8 (図13)

桁行2間 ($b - b'$ 4.32m、 $d - d'$ 4.16m)、梁行3間 ($a - a'$ 6.16m、 $c - c'$ 6.32m)の建物である。柱間は $b - b'$ で2.0m、2.32m、 $d - d'$ で1.92、2.24m、 $a - a'$ 1.76~2.32m、 $c - c'$ 1.6~2.52mを測る。掘り方の平面形態は隅丸方形 (SP81、SP104、SP106)、楕円形及び不定形で、隅丸方形は一辺0.56~0.88m、その他は長軸0.56~1.16mを測る。柱の痕

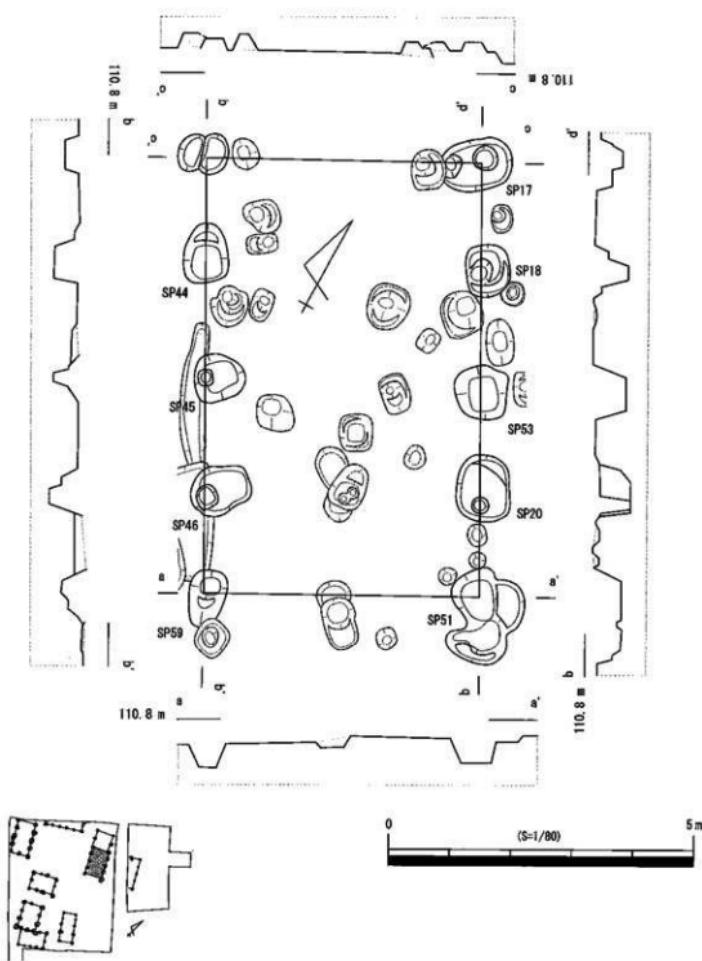


図9 SB 4 平面図・断面図

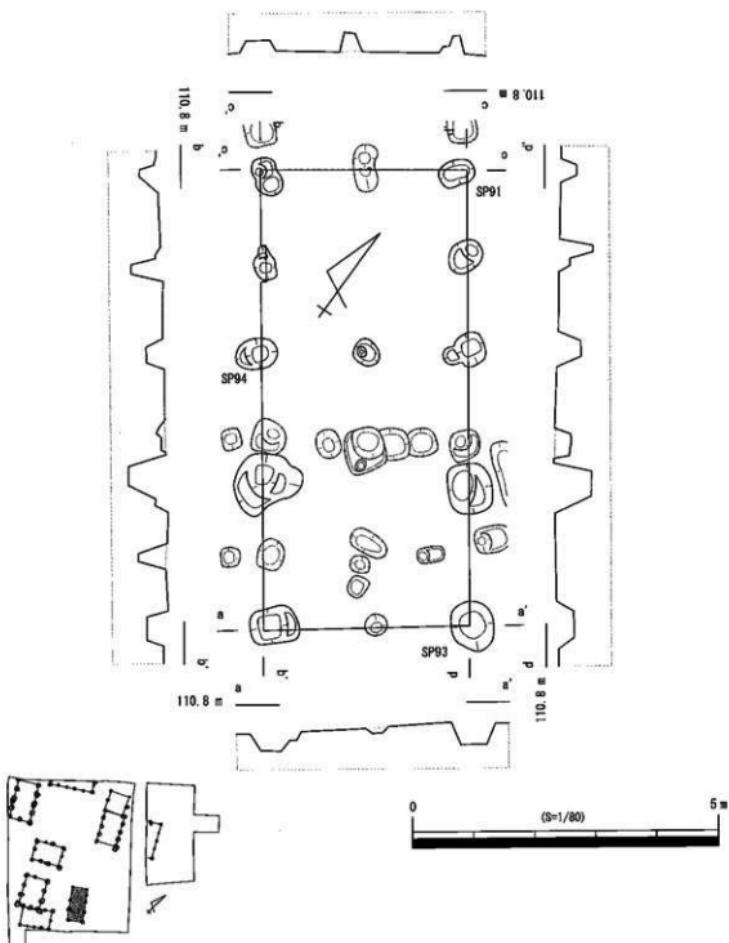


図10 SB 5 平面図・断面図

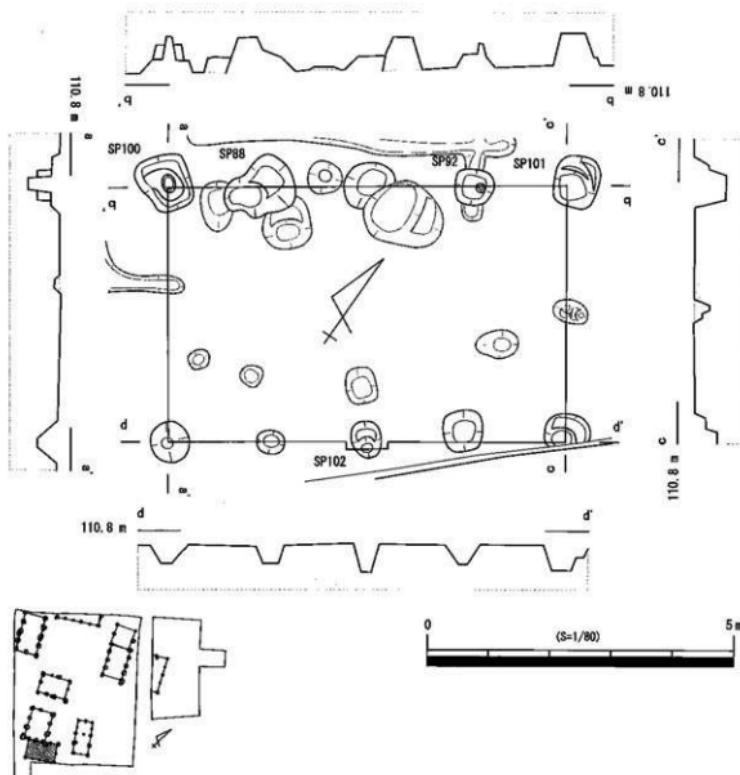


図11 SB 6 平面図・断面図

跡はSP80、SP81、SP104～107で確認され、直径24～32cmを測る。建物の主軸はN-59°-Eである。SB 8を構成するピットからは土師器壺、須恵器壺蓋、壺身(42)などの破片が出土している。

SB 9 (図19)

建物の半分が調査区外に伸びる。桁行2間以上(a-a'3.2m以上)、梁行4間(b-b'8.0m)の建物である。柱間はa-a'で0.8m以上、2.4m、b-b'で1.76～2.32mを測る。掘り方の平面形態は楕円形で、長軸0.32～0.64mを測る。柱の痕跡は確認されなかった。建物の主軸はN-29°-Wで、SB 9を構成するピットからは遺物の出土は確認されなかった。

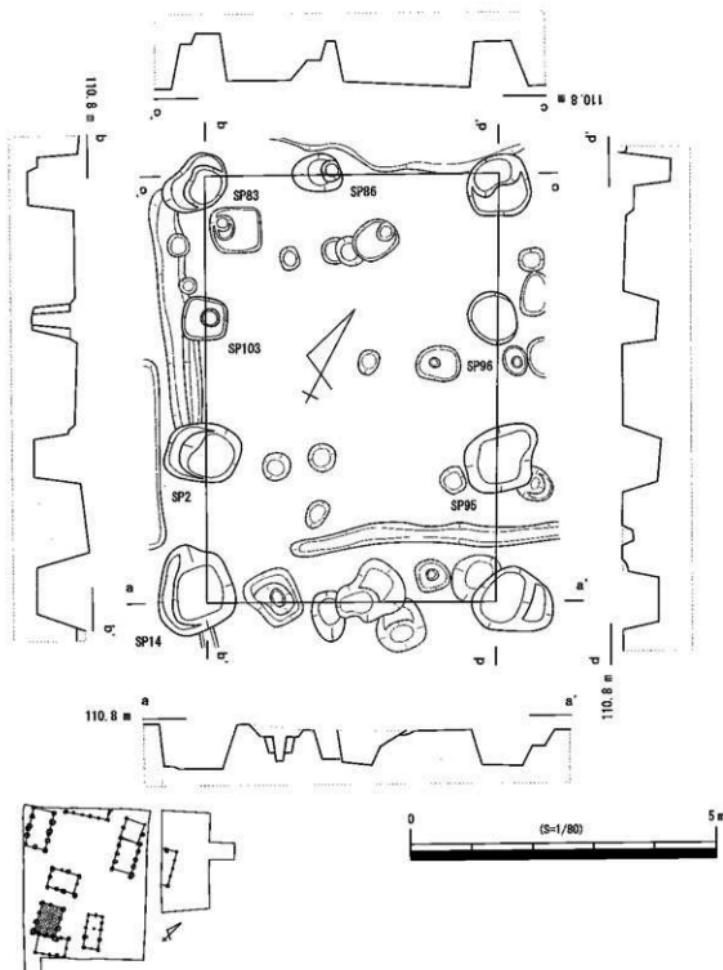


図12 SB 7平面図・断面図

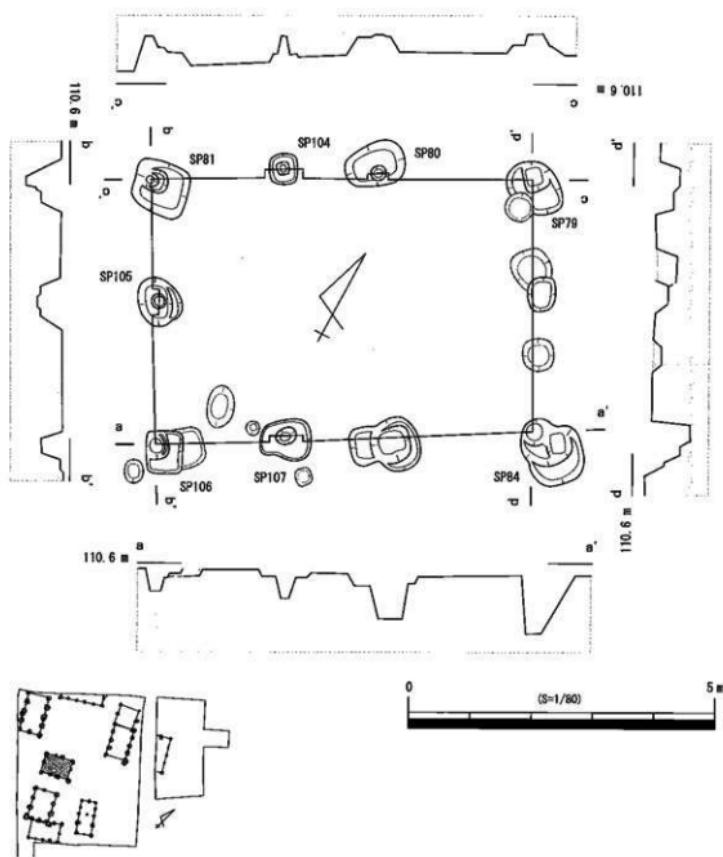


図13 SB 8平面図・断面図

出土遺物

SB 1 (図15、17)

(1～5、7)は須恵器坏蓋である。口縁端部は屈曲して外側に面を持つもの(1～3、7)と丸くおさまるもの(4)とがある。いずれもヨコナデ調整。(7)はやや摩滅している。(5)は天井部のつまみ部分である。(6、8～11)は須恵器坏身である。(6)は口縁

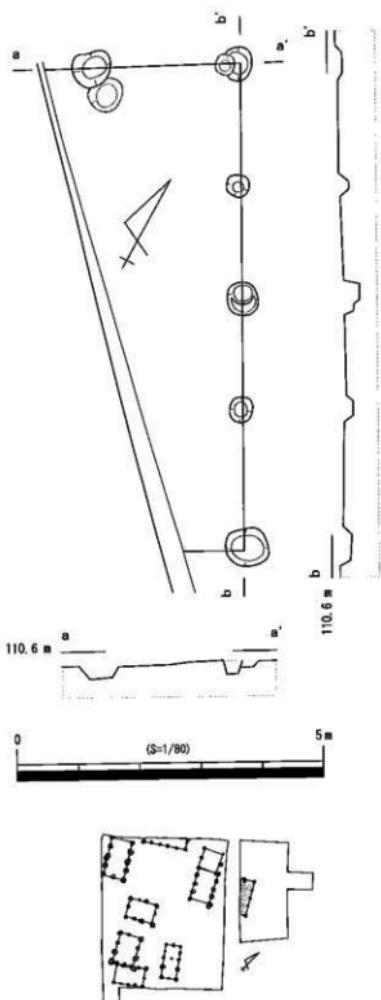


図14 SB 9 平面図・断面図

端部が外側に短く屈曲する。(8)は底部平底。ヘラ切り調整。体部は外方に開き気味に直線的に伸び、口縁端部は丸くおさまる。摩滅が著しい。(9~11)は低短な高台がつく。体部と底部の境は(9)は丸みを持つが、(10、11)は屈折する。いずれも底部はヘラ切りで、高台接合の痕跡を残す。(12)は須恵器器台である。器表は沈線によって区画された2段に波状文が施される。脚端部は内面に稜を持つ。内面に自然釉がかかる。(13)は土師器壺。口縁端部は内面に丸く肥厚する。ヨコナデ調整。(14、15)は七錐。ユビオサエによって成形。(69)は叩石である。楕円球体を呈す。側面2箇所に敲打痕を持つ。材質は花崗岩である。

SB 2 (図15)

(16)は土師器皿である。底部は平底で、口縁端部は若干肥厚して丸くおさまる。(17)は須恵器壺蓋である。大きく焼き歪みしており、外面1/2に自然釉がかかる。内面にはほかの器の付着がみられる。(18)は底部平底。ヘラ切り調整。体部は外方に開き気味に直線的に伸び、口縁端部は細くなり、丸くおさまる。

SB 3 (図15)

(19、20)は須恵器壺蓋である。(19)は口縁端部はやや細くなり屈曲する。外面に自然釉がかかる。(20)は天井部は丸みを帯びて笠形を呈し、つまみが付く。

SB 4 (図15)

(21)は土師器碗である。底部は丸

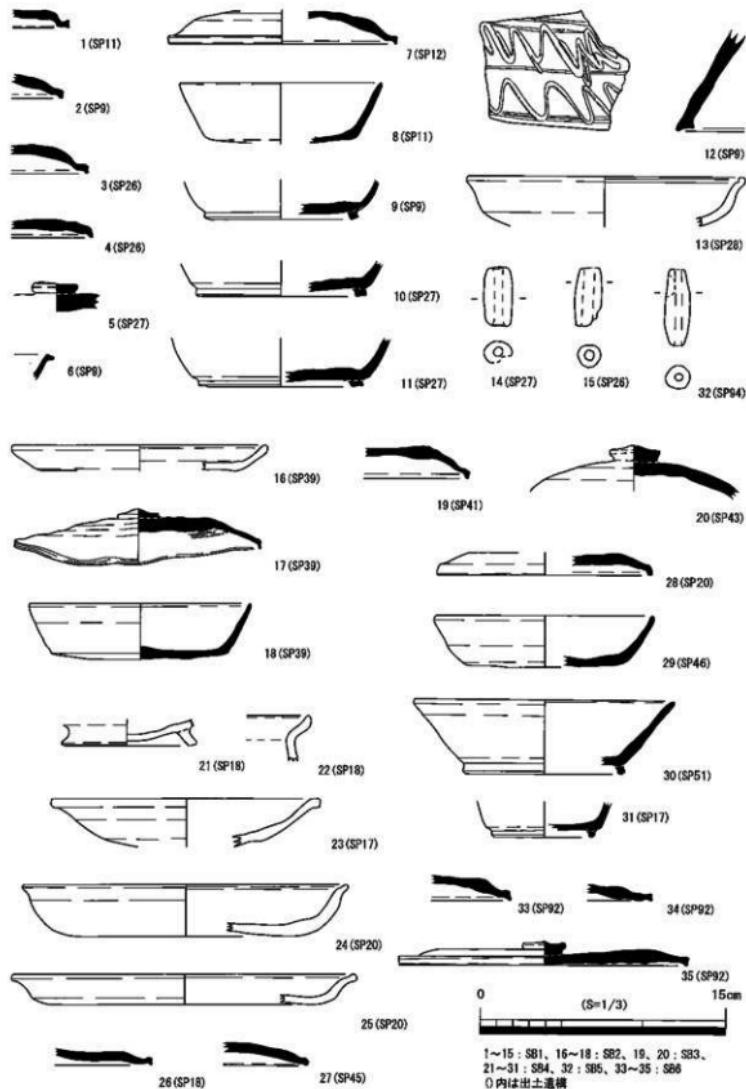


図15 出土遺物実測図

みを帯び、やや外側に張り出す高台がつく。ヘラ切り調整。(22)は土師器甕の口縁部。(23、24)は土師器坏である。(23)は口縁端部は外側に面を持つ。(24)は口縁部が短く屈曲し、端部は丸くおさまる。(25)は土師器皿。平底で口縁部は外方に開き、端部は丸くおさまる。(23～24)はいずれもヨコナデ調整。(26～28)は須恵器坏蓋である。口縁端部は(26)は屈曲し、(27、28)はやや肥厚して丸くおさまる。(28)は天井部は平らでヘラ切り調整。いずれも口縁部はヨコナデ調整。(29、30)は須恵器坏身である。(29)は底部ヘラ切りで、口縁端部は細くなり、丸くおさまる。(30)は高台を持つ。体部は外方に開き気味に伸び、端部は丸くおさまる。(31)は須恵器壺である。体部は直線的にのびる。底部はヘラ切りで、低短な高台がつく。高台は接合の痕跡を残す。内面は自然釉がかかる。

SB 5 (図15)

(32)は土錐。両端が若干細くなっている。ユビオサエによって成形。

SB 6

(33～35)は須恵器坏蓋である。口縁端部は屈曲して外側に面を持つ。いずれもヨコナデ調整。(33)は外面に自然釉がかかる。(35)は天井部は平らで、つまみが付く。

SB 7 (図16)

(36)は土師器坏。口縁端部は内面に丸く肥厚する。ヨコナデ調整。(38、39)は須恵器坏身である。低短な高台がつく。体部と底部の境は屈折する。いずれも底部はヘラ切りで、高台接合の痕跡を残す。(37、40)は須恵器坏蓋である。(37)は口縁端部は外側に面を持ち、丸くおさまる。(40)は天井部は平らでヘラ切り調整。口縁端部は屈曲して外側に面を持つ。いずれも口縁部はヨコナデ調整。(41)は灰釉陶器の椀である。体部は丸みを持ち、高台は外方に若干張り出す。高台接合の痕跡を残す。

SB 8 (図16)

(42)は須恵器坏身である。底部は平底でヘラ切り調整。体部は外方に開き気味に直線的に伸び、口縁端部は細くなり、丸くおさまる。

SD 1～3 (図16)

SD 1～3 からは須恵器坏蓋(54、57)、坏身(55、56)が出土している。(54)は天井部が平らで、口縁端部は外側に面を持ち、丸くおさまる。(57)は口縁端部は屈曲して外側に面を持つ。(55、56)は底部は平底でヘラ切り調整。体部は外方に開き気味に直線的に伸びる。(55)は低短な高台がつく。高台は接合の痕跡を残す。(56)は口縁端部は細くなり、丸くおさまる。

SD 6 (図16)

土師器甕(58)と土師器小型器台(59)が出土している。(58)は布留式甕である。口縁部は、くの字上に屈曲し、口縁端部は内側に肥厚し、丸くおさまる。内外面ともヨコナデ調整である。(59)は小型器台の脚部である。内外面に受部との接合の痕跡を残す。外面はタテ方向のミガキを施す。

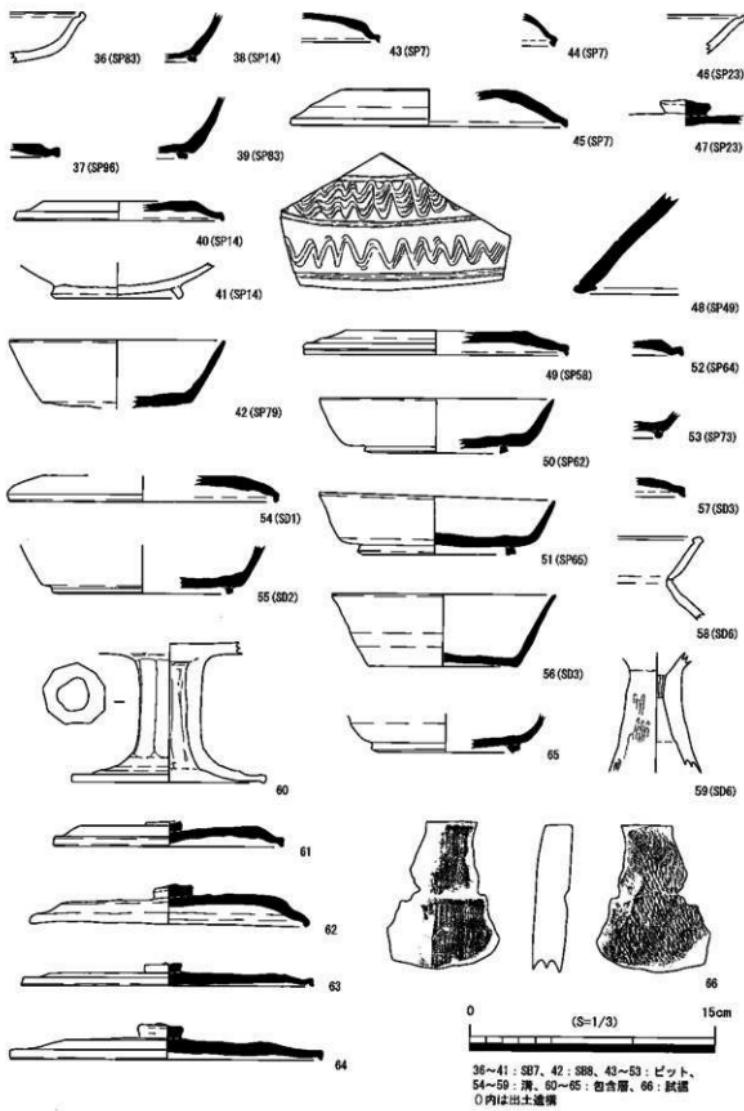


図16 出土遺物実測図

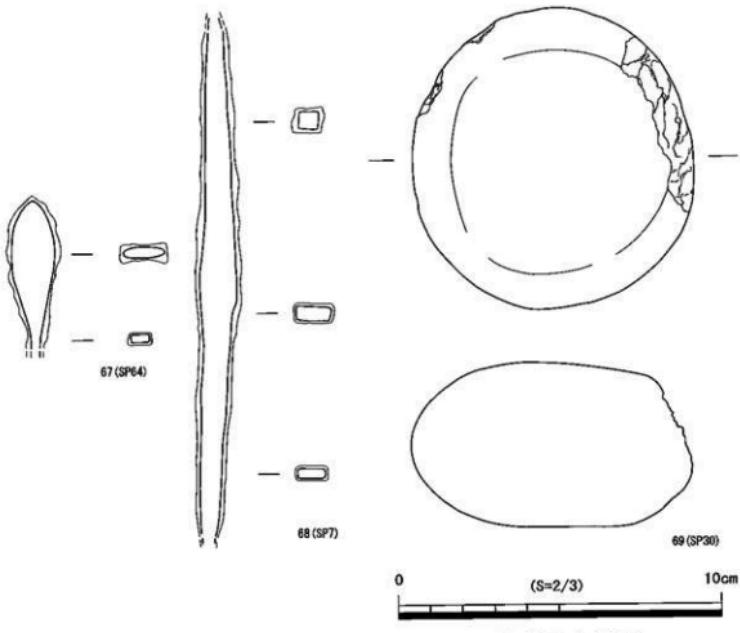


図17 出土遺物実測図

ピット（図16、17）

SP 7 からは須恵器壺蓋（43～45）、鉄製品（68）が出土している。（43、44）は口縁端部は屈曲して外面に面を持つ。（45）は天井部は平らで、口縁端部は外面に面を持ち、丸くおさまる。SP23からは土師器壺（46）と須恵器壺蓋（47）が出土している。土師器壺（46）は外方に直線的にのび、口縁端部は内面に丸く肥厚する。ヨコナデ調整。口縁端部は内面に丸く肥厚する。ヨコナデ調整。鉄製品（68）は腐食が激しく、器種の特定にはいたらないが、工具であったと考えられる。形状は棒状を呈し、両端部は欠損。SP49からは須恵器器台（48）が出土している。器表は沈線によって区画された2段に波状文が施される。脚端部は内面に稜を持つ。SP58、SP64からは須恵器壺蓋（49、52）が出土している。口縁端部は屈曲して外側に面を持つ。（49）は平らな天井部を持つ。SP62、SP65、SP73からは須恵器壺身（50、51、53）が出土している。底部は平底でヘラ切り調整。体部と底部の境は屈折する。体部は

外方に開き気味に直線的に伸び、口縁端部は細くなり、丸くおさまる。低短な高台がつき、接合の痕跡を残す。(50、51) は高台が底部内側につく。またSP64から鉄鎌(67) が出土している。鎌部の形状は柳葉状を呈し、茎基部は断面長方形を呈す。鎌身の関は不明瞭である。

包含層(図16)

(60) は高坏。脚柱部は面取りが施されて多面体の形状で直線的にのび、裾部はラッパ状に開く。端部は外側に面をもつ。(61~64) は須恵器坏蓋。天井部は平らで、つまみを持つ(61、63、64) の口縁端部は屈曲して外側に面を持つ。(63) の口縁端部は丸くおさまる。

試掘(図16)

(66) は平瓦。残存している側面の1面で面取りが確認できた。凸面に繩目タタキの、凹面に布目の痕跡を残す。

IV おわりに

今回の調査では柱穴、溝、落ち込み状遺構、火葬墓を検出した。古墳時代の遺構はSD6のみで、他は確認されなかったが、SD6の断面形状がV字状を呈し、直線的に長く伸びることから、人為的な構築物と推測される。前回の調査では不定形土坑が11基検出されていることからも、周辺に古墳時代前期の集落が存在する可能性が考えられる。

火葬墓は、ほぼ立方体の形状で埋土は炭と赤褐色の焼土が充填された状態であったことから火葬墓と想定したが、遺物の出土もなく不明な点が多い。今後、資料の増加を待って再検討を加えたい。

ピットは355基、調査区西側、北側、南東側の大きく3箇区域で集中して検出された。この3区域では複数回に渡って掘立柱建物が建築されたと考えられる。ピットからの出土遺物をみると、須恵器器台(12、48) のように古いものも含まれるが、概ね8世紀後半から9世紀におさまるものである。今回調査地は前回調査の成果も踏まえて考慮すると、集落の西端に位置していることが推測される。

掘立柱建物は深さや、柱間、主軸の方向などを考慮して9棟の検出が可能であった。主軸からN-32°~36°-W(SB1、SB3、SB5)、N-56°~59°-E(SB2、SB6、SB8)、N-27°~29°-W(SB4、SB7、SB9)の3群に識別できる。前回調査や木曾遺跡で検出された掘立柱建物を含めて考慮すると、主軸は大半がN-32°~45°-Wの範疇に収まることから、芹川右岸の掘立柱建物の主軸に関しては、この範疇に収まる傾向があったと考えられる。

出土遺物では前回調査同様、土錐が出土しており、芹川などの河川で漁労を行っていたことが推測され、生業の一端を垣間見ることができた。また混入ではあるが縄文時代の叩石が出土したことから、今回の調査地近辺に縄文時代の遺構がある可能性が考えられる。

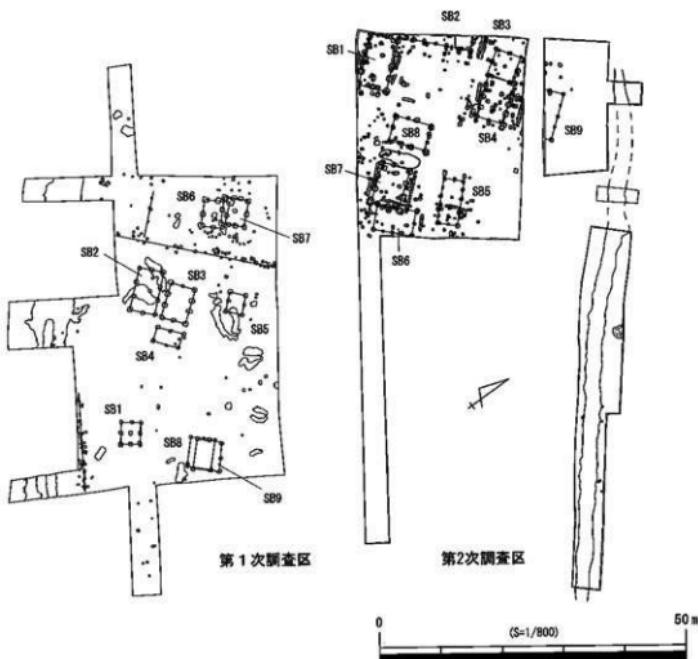


図18 第1次調査・第2次調査全体図

参考文献

- 1 谷口 撫 早川 圭『八反切遺跡』彦根市教育委員会 2006
- 2 谷口 撫 早川 圭『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市教育委員会 2005
- 3 音田直記『土田遺跡(第6~8次調査)』多賀町教育委員会 2004
- 4 音田直記『木曾遺跡(第2~7次調査)』多賀町教育委員会 1999
- 5 北村圭弘『木曾遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1995
- 6 平井美典 重岡 卓『木曾遺跡Ⅱ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1996
- 7 堀 真人 重岡 卓『木曾遺跡Ⅲ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1998
- 8 阿刀弘史『扇状地の考古学』第31回企画展 滋賀県立安土城考古博物館 2006

表1 芹川流域の遺跡で検出された掘立柱建物一覧表

遺跡名	遺跡No	方位	桁行(m)	棟間(m)	掘り方		柱穴(cm)
					形状	寸法(cm)	
八反切2次 (今松側)	SB 1	N - 2° - W	1間(4.92)	4間(9.18)	楕円形・楕円形・不定形	88~168	24~28
	SB 2	N - 5° - E	1間(2.32)以上	5間(11.8)	楕円形・不定形	32~112	12~20
	SB 3	N - 35° - W	1間(4.24)	2間(4.48)	楕円形	48~104	24
	SB 4	N - 29° - W	1間(4.48)	4間(7.16)	楕円形・不定形	68~152	24
	SB 5	N - 35° - W	1間(3.35)	4間(7.6)	楕円形・不定形	60~104	確認されず
	SB 6	N - 56° - E	1間(4.24)	4間(6.52)	楕円形・楕円形・不定形	40~120	16~32
	SB 7	N - 27° - W	2間(4.78)	4間(7.04)	楕円形・楕円形	60~144	28
	SB 8	N - 59° - E	2間(4.32)	3間(6.32)	楕円形・楕円形・不定形	56~116	24~32
	SB 9	N - 29° - W	2間(3.3)以上	4間(8.0)	楕円形	32~64	確認されず
八反切1次	SB 1	N - 44° - W	2間(3.7)	2間(3.2)	方形	70	20~30
	SB 2	N - 34° - W	3間(7.2)	2間(4.3)	方形	70	20~30
	SB 3	N - 32° - W	3間(6.0)	2間(4.4)	方形	70	20~30
	SB 4	N - 63° - E	2間(4.7)	1間(2.5)	方形	50~70	20
	SB 5	N - 33° - W	2間(3.5)	1間(2.7)	方形	50~70	20
	SB 6	N - 37° - W	2間(4.7)	2間(4.1)	不定形	70~100	30
	SB 7	N - 36° - W	2間(4.7)	3間(4.1)	方形	70	20~30
	SD 8	N - 38° - W	2間(5.1)	2間(4.1)	方形	50~70	20
	SD 9	N - 40° - W	2間(5.0)	2間(4.2)	方形	70~100	20
本村 I	1TBS0101	N - 35° - W	2間(3.9)以上	1間(1.8)以上	方形	50	
	1TBS0102	N - 45° - W	2間(4.5)以上	2間(4.5)以上	方形		18
	2TBS0201	N - 42° - W	2間(13.2)	3間(7.2)		50~60	20~30
	2TBS0202	N - 42° - W	2間(3.0)	1間(2.2)			
	3TBS0301	N - 34° - W	2間(3.7)	3間(5.4)	円形	40~50	
	3TBS0302	N - 45° - W	3間(5.4)	3間(4.0)	方形	50	
	3TBS0303	N - 12° - W	3間(5.4)	2間(3.8)			
	4TBS0402	N - 13° - W	3間(4.2)	4間(6.2)	円形	45~60	20
	4TBS0403	N - 14° - W	3間	3間	円形	55~70	18~25
	4TBS0404	N - 12° - W	3間(4.5)	3間(5.6)			
本村 II	4TBS0405	N - 13° - W	3間(4.6)	3間(5.4)			
	5TBS0502	N - 15° - W	3間(6.1)	3間以上	円形	60	
	8TBS0801	N - 44° - W	2間(4.2)	2間(4.6)	円形	35~80	
	SB0101	N - 5° - W	東西2間(3.86)	南北2間(2.1)	円形	45	12~21
	SB0202	N - 15° - E	5間(8.0)	3間(4.6)	円形	60	15~20
	SB0203	N - 43° - W	3間(5.0)	2間(5.8)	円形	55	15~20
本村 III	SB0204	N - 25~30° - W	8間(6.6)	2間(4.76)	円形	55~100	20
	SB0301		3間	4間			20
	SB0302		3間	3間			20
	SB0303		3間	3間			20
	SB0304		3間	4間			20
本村 IV	SB0305		3間	4間			20
	T - 6·SB1	N - 15° - W	3間(4.4m)	2間(3.4m)	円形		15~25
	T - 6·SB2	N - 14° - W	3間(6.3m)	2間(4.8m)	方形・円形		20~40
	T - 6·SB3	N - 17° - W	2間(5.0m)以上	2間(4.2m)以上	方形・円形		13~30
	T - 7·SB1	N - 40° - W	2間(4.2m)以上	1間(2m)	方形		15~20
	T - 7·SB2	N - 10° - W	2間(4.4m)以上	2間(4.6m)	方形・円形		20~45
	T - 7·SB3	N - 34° - E	3間(4.8m)	3間(4.8m)	楕円形		15~25
	T - 8·SB1	N - 2° - W	2間(3.9m)以上	1間(2.4m)以上	円・楕円形		15~25
	T - 8·SB2	N - 36° - W	4間(6.3m)	3間(4.5m)	円・楕円形		15~20
	T - 9·SB1	N - 38° - W	4間(6.3m)	3間(4.4m)	方形・円形		15~25
本村 V	T - 9·SB2	N - 42° - W	3間(4.8m)	3間(4.4m)	方形・円形・楕円形		15~25
	T - 9·SB3	N - 28° - W	3間(7m)	2間(4.8m)	円・楕円形		10~40

※出典は文末の参考文献1、5~7から。空欄は報告書に記載がないことを示す。

表2 出土遺物観察表

博物番号 回収番号	通番	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調 (外面/内面) 組成: 納七	残存状況	備 考
国15-1 SB1 国版十一 (SP11)	須恵器 环身		(残)1.1			淡青灰色 良・~1mmの砂粒有	1/10残存	
国15-2 SB1 国版十一 (SP19)	須恵器 环身		(残)1.5			灰色 良・砂粒殆ど無	1/10残存	
国15-3 SB1 国版十一 (SP26)	須恵器 环身		(残)1.8			暗灰色 良・~1mmの砂粒有	1/10残存	
国15-4 SB1 国版十一 (SP26)	須恵器 环身		(残)1.2			淡青灰色 良・砂粒殆ど無	1/10残存	
国15-5 SB1 国版十一 (SP27)	須恵器 环身		(残)1.7			淡灰色 良・~1mmの砂粒有	つまみ部のみ 残存	全体的にやや摩滅している。
国15-6 SB1 国版十一 (SP29)	須恵器 环身		(残)1.6			淡灰色 良・砂粒殆ど無	1/10残存	
国15-7 SB1 国版十一 (SP12)	須恵器 环身	14.0	(残)2.0			灰白色 良・~1mmの砂粒有	1/5残存	全体的にやや摩滅している。
国15-8 SB1 国版十一 (SP11)	須恵器 环身	12.4	3.7			暗灰白色 良・~1mmの砂粒有	1/1残存	
国15-9 SB1 国版十一 (SP9)	須恵器 环身		(残)2.5	8.6		暗青灰色 良・~2mmの砂粒有	底部1/3残存	
国15-10 SB1 国版十一 (SP27)	須恵器 环身	9.2	(残)2.2			淡灰色 良・~1mmの砂粒有	底部1/5残存	
国15-11 SB1 国版十一 (SP27)	須恵器 环身	8.8	(残)3.0			淡青灰色 良・~1mmの砂粒有	底部1/5残存	
国15-12 SB1 国版十一 (SP1)	須恵器 器台		(残)6.4			暗灰白色 良・~2mmの砂粒有	不明	内面は自然釉を被る。
国15-13 SB1 国版十一 (SP28)	土師器 环	16.8	(残)3.0			褐色 良・砂粒殆ど無	1/4残存	
国15-14 SB1 国版十一 (SP27)	土錠	長3.6	最大径1.8	孔径0.7		暗灰白色 良・~3mmの砂粒有	2/3残存	重さ9.39 g
国15-15 SB1 国版十一 (SP26)	土錠	長3.6	最大径1.6	孔径0.7		淡灰黄色 良・~2mmの砂粒有	1/2残存	重さ7.35 g。全体的にやや摩滅している。
国15-16 SB2 国版十二 (SP29)	土師器 皿	17.6	1.6			橙色 良・~2mmの砂粒有	1/4残存	
国15-17 SB2 国版九 (SP39)	須恵器 环身	15.4	3.5			暗青灰色 良・~3mmの砂粒有	完形	焼き歪みしている。外側は自然釉を被り、内面は別製品が一部付着。
国15-18 SB2 国版九 (SP39)	須恵器 环身	13.6	3.45			淡青灰色 良・砂粒殆ど無	1/3残存	
国15-19 SB3 国版十二 (SP41)	須恵器 环身		(残)2.0			灰色 良・~2mmの砂粒有	1/10残存	外側は自然釉を被る。
国15-20 SB3 国版十二 (SP43)	須恵器 环身					淡灰色 良・~2mmの砂粒有	1/4残存	
国15-21 SB4 国版十一 (SP18)	土師器 碗		(残)1.6	7.6		濃褐色 良・~5mmの砂粒有	底部残存	底部外側静止ハラ剥り。
国15-22 SB4 国版十一 (SP18)	土師器 碗		(残)2.8			淡灰褐色 良・~2mmの砂粒有	1/10残存	
国15-23 SB4 国版十一 (SP17)	土師器 碗	16.6	(残)3.0			橙色 良・砂粒殆ど無	1/4残存	
国15-24 SB4 国版十二 (SP20)	土師器 碗	20.0	3.2			橙色 良・~2mmの砂粒有	1/4残存	
国15-25 SB4 国版十二 (SP17)	土師器 皿	21.0	(残)2.0			褐色 良・~1mmの砂粒有	1/4残存	
国15-26 SB4 国版十二 (SP18)	須恵器 环身		(残)1.0			淡青灰色 良・砂粒殆ど無	1/10残存	重ね焼きの痕跡有
国15-27 SB4 国版十二 (SP45)	須恵器 环身		(残)1.4			暗灰色 良・砂粒殆ど無	1/10残存	
国15-28 SB4 国版十二 (SP20)	須恵器 环身	13.2	(残)1.4			淡灰色 良・~1mmの砂粒有	1/5残存	
国15-29 SB4 国版十二 (SP46)	須恵器 环身	13.4	(残)3.2			暗灰色 良・砂粒殆ど無	1/4残存	
国15-30 SB4 国版十二 (SP51)	須恵器 环身	16.2	(残)4.6	9.7		暗灰色 良・砂粒殆ど無	口縁部1/5・ 底部1/4残存	全体的にやや摩滅している。
国15-31 SB4 国版十二 (SP17)	須恵器 盒		(残)2.2	6.2		灰色 良・砂粒殆ど無	底部1/2残存	底部内面は自然釉を被る。
国15-32 SB5 国版十一 (SP94)	土錠	長4.8	最大径1.5	孔径0.4		暗茶褐色 良・~3mmの砂粒有	完形	重さ10.7 g
国15-33 SB6 国版十二 (SP92)	須恵器 环身		(残)1.6			暗青灰色 良・砂粒殆ど無	1/3残存	
国15-34 SB6 国版十三 (SP92)	須恵器 环身		(残)1.0			青灰色 良・砂粒殆ど無	1/5残存	外側は自然釉を被る。
国15-35 SB6 国版十三 (SP92)	須恵器 环身	19.0	1.5			灰白色 良・~3mmの砂粒有	1/4残存	

種類番号 図版番号	遺構	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	焼成・胎土	残存状況	備考
圖16-36 圖版十三 (SP83)	土器器 环			(残)3.1		褐色 良・砂粒殆ど無	1/10残存	
圖16-37 圖版十三 (SP96)	須恵器 环蓋			(残)0.8		藍灰色 良・~1mmの砂粒有	1/10残存	
圖16-38 圖版十三 (SP14)	須恵器 环身			(残)3.0		灰色 良・砂粒殆ど無	1/5残存	外面は自然釉を被る。
圖16-39 圖版十一 (SP83)	須恵器 环身			(残)3.9		灰色 良・~1mmの砂粒有	1/10残存	
圖16-40 圖版十二 (SP14)	知音器 环蓋	12.8	(残)1.2			灰色 良・砂粒殆ど無	1/4残存	
圖16-41 圖版十三 (SP14)	灰釉陶器 瓶			(残)2.2	7.6	明灰色 良・砂粒殆ど無	1/2残存	底部外面静止ヘラ切り。
圖16-42 圖版十三 (SP79)	須恵器 环身	13.2	(残)4.2	9.2		暗赤色 良・~1mmの砂粒有	1/3残存	
圖16-43 圖版十一 (SP7)	須恵器 环蓋			(残)1.8		暗赤色 良・~1mmの砂粒有	1/10残存	
圖16-44 圖版十三	須恵器 环身			(残)2.0		外・暗灰色/内・灰白色 良・砂粒殆ど無	1/10残存	
圖16-45 圖版十三	須恵器 环身	19.0	(残)2.4			暗灰色 良・~1mmの砂粒有	1/4残存	
圖16-46 圖版十一 (SP23)	土器器 环			(残)2.4		褐色 良・~3mmの砂粒有	1/4残存	
圖16-47 圖版十一 (SP23)	知音器 环蓋			(残)1.6		外・暗赤色/内・灰色 良・~3mmの砂粒有	つまみ型のみ 残存	
圖16-48 圖版十二	SP49	刻立器 器台		(残)6.3		暗灰白色 良・~2mmの砂粒有		
圖16-49 圖版十四	SP58	須恵器 环身	16.2	(残)1.5		淡灰色 良・~2mmの砂粒有	1/4残存	
圖16-50 圖版十四	SP62	須恵器 环身	14.4	(残)3.4	8.0	灰色 良・~1mmの砂粒有	1/3残存	
圖16-51 圖版十一	SP65	須恵器 环身	14.5	(残)3.6	8.9	外・灰白色/内・淡灰色 良・~5mmの砂粒有	口縁部1/2- 底部完存	
圖16-52 圖版十四	SP64	須恵器 环身		(残)1.0		淡灰色 良・~1mmの砂粒有	1/10残存	
圖16-53 圖版十四	SP73	須恵器 环身		(残)1.7		灰色 良・~3mmの砂粒有	底部1/5残存	
圖16-54 圖版十四	SD1	須恵器 环蓋	16.4	(残)1.6		外・暗灰色/内・灰色 良・~2mmの砂粒有	1/4残存	
圖16-55 圖版十四	SD2	須恵器 环身		(残)3.0	10.6	暗青灰色 良・~2mmの砂粒有	底部1/5残存	
圖16-56 圖版十四	SD3	須恵器 环身	14.0	4.5	9.1	暗灰白色 良・~2mmの砂粒有	口1/10-底1/ 3残存	
圖16-57 圖版十四	SD3	須恵器 环身		(残)1.0		青灰色 良・~2mmの砂粒有	1/10残存	
圖16-58 圖版十四	SD6	土器器 型		(残)5.0		淡褐色 良・~1mmの砂粒有	1/10残存	
圖16-59 圖版十四	SD6	土器器 小型器台		(残)7.3		暗褐色 良・~1mmの砂粒有	脚部上半残存	全体的にやや摩滅している。
圖16-60 圖版十五	包含層	土器器 高环		(残)8.8	9.0	褐色 良・~1mmの砂粒有	脚部左半 部1/3残存	
圖16-61 圖版十五	包含層	須恵器 环蓋		(残)1.5		外・灰白色/内・淡灰色 良・~7mmの砂粒有	1/4残存	重ね焼きの痕跡有。外面は自 然釉を被る。
圖16-62 圖版十五	包含層	須恵器 环身	17.1	(残)2.5		淡灰白色 良・砂粒殆ど無	3/4残存	
圖16-63 圖版十五	包含層	須恵器 环身	18.0	(残)1.4		淡褐色 良・砂粒殆ど無	1/4残存	
圖16-64 圖版十五	包含層	須恵器 环身	19.2	(残)2.2		淡暗青灰色 良・~3mmの砂粒有	1/4残存	重ね焼きの痕跡有。
圖16-65 圖版十五	包含層	須恵器 环身		(残)2.4	8.2	外・青灰色/内・淡灰色 良・砂粒殆ど無	1/3残存	
圖16-66 圖版十四	試掘	瓦 平瓦				淡褐色 良・~2mmの砂粒有	1/10残存	凸面に繩目タタキ、凹面に右 肩の痕跡を残す。
圖16-67 圖版十五	SP64	鉄製品 鎧	刃部長 4.7	刃部最大幅 1.5	0.7	刃部最大厚 0.7	刃部残存	茎部幅0.7cm、厚0.4cm。
圖16-68 圖版十五	SP7	鉄製品 工具?	長 (残)16.0	最大幅 1.35	0.8		両端部欠損	
圖16-69 圖版十五	SB1	石製品 叩石	長 9.4	最大幅 8.8	5.1		完形	花崗岩製。



SD 6 全景（東から）



SD 6 全景（西から）



SD 6 断面図



掘立柱建物群全景（東南から）



掘立柱建物群全景（西から）



掘立柱建物群全景（南から）



掘立柱建物群全景（南西部分）



掘立柱建物群全景（南東部分）



掘立柱建物群全景（北東部分）



掘立柱建物（SB 1）



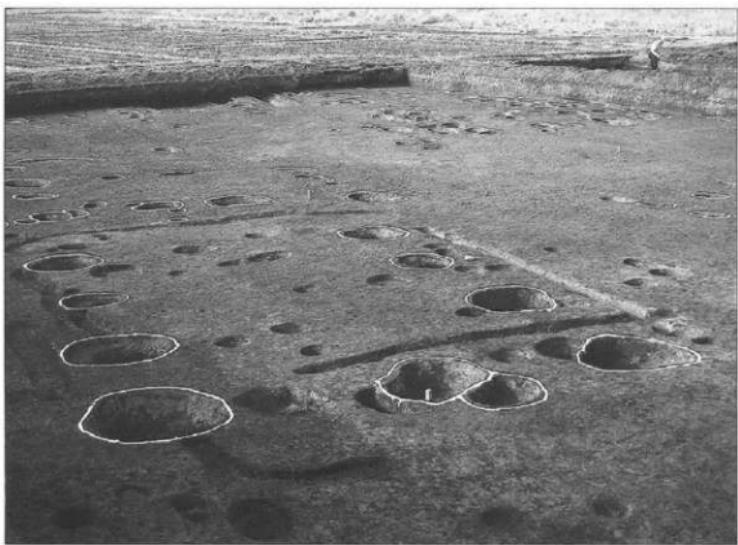
掘立柱建物（SB 2）



掘立柱建物（SB 3、4）



掘立柱建物 (SB 5)



掘立柱建物 (SB 7)



掘立柱建物 (SB 8)

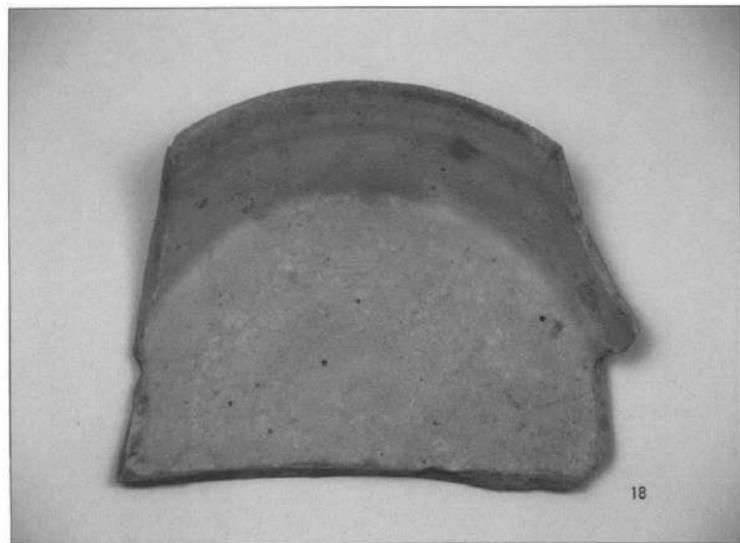


掘立柱建物 (SB 9)



17

掘立柱建物（SB 2）出土土器



18

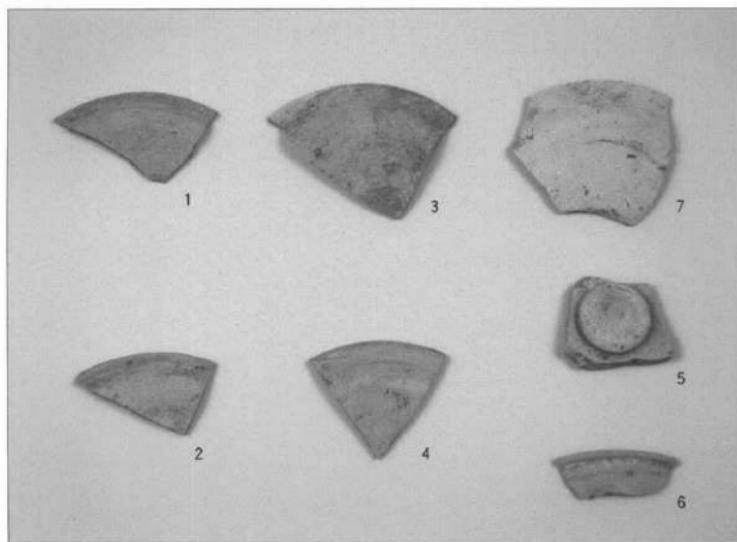
掘立柱建物（SB 2）出土土器



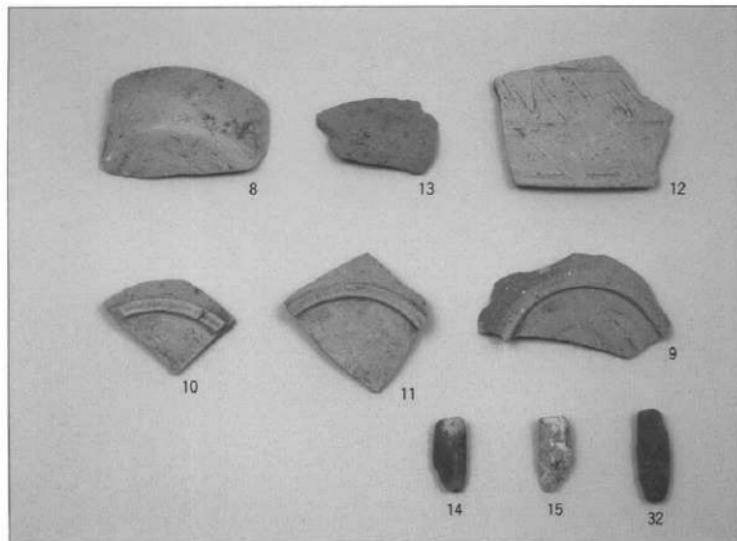
ピット出土土器



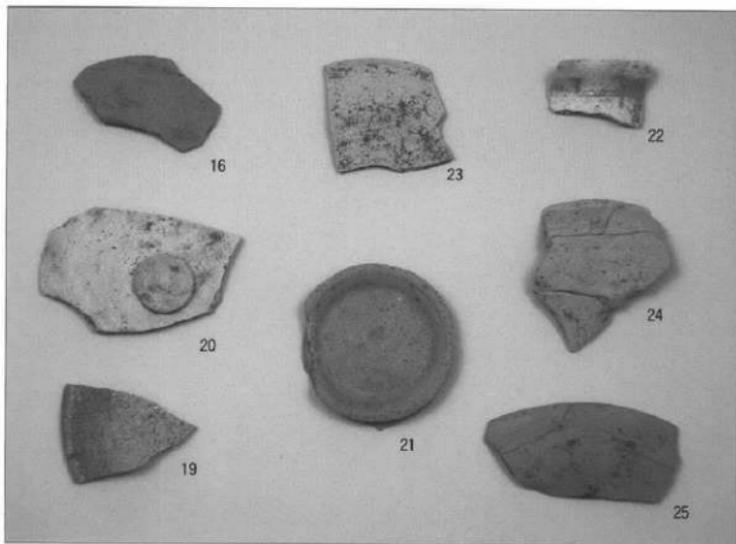
包含層出土土器



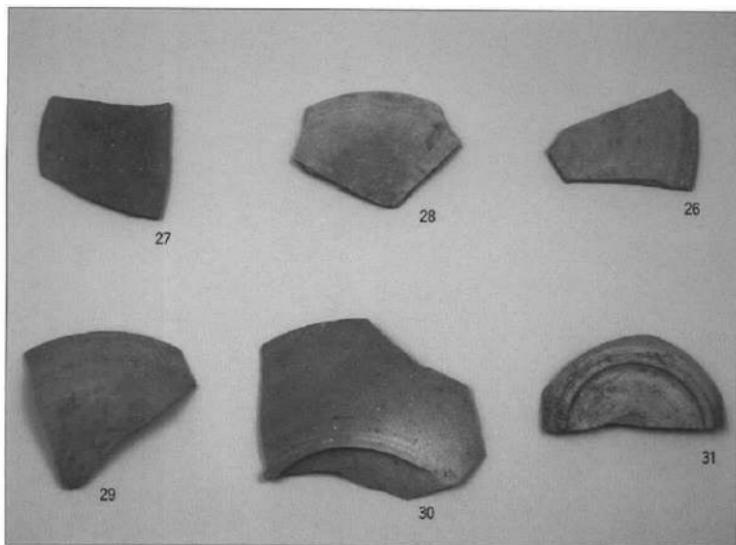
掘立柱建物（SB 1）出土土器



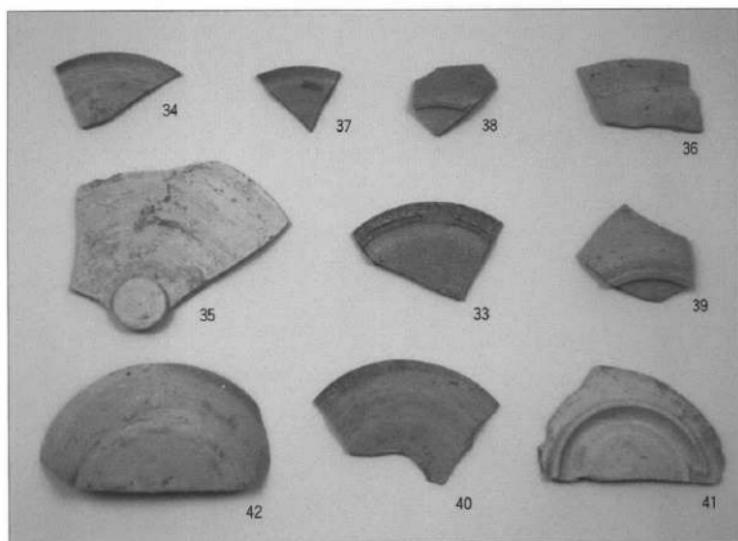
掘立柱建物（SB 1、SB 5）出土土器



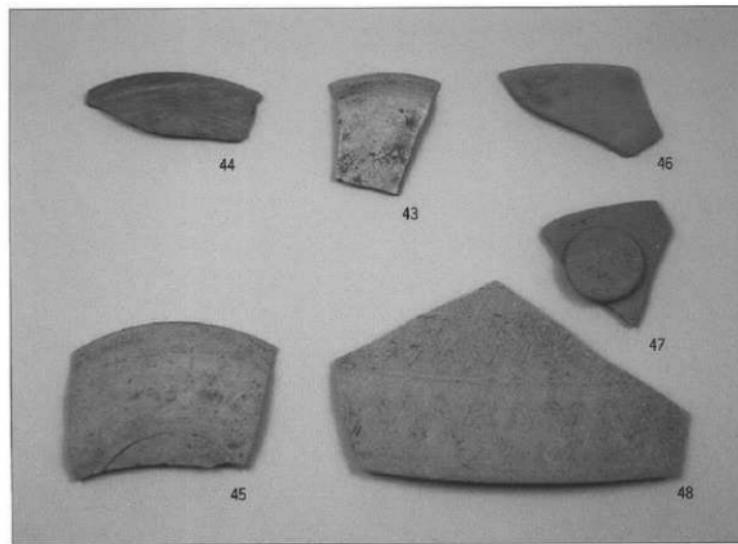
掘立柱建物（SB 2～SB 4）出土土器



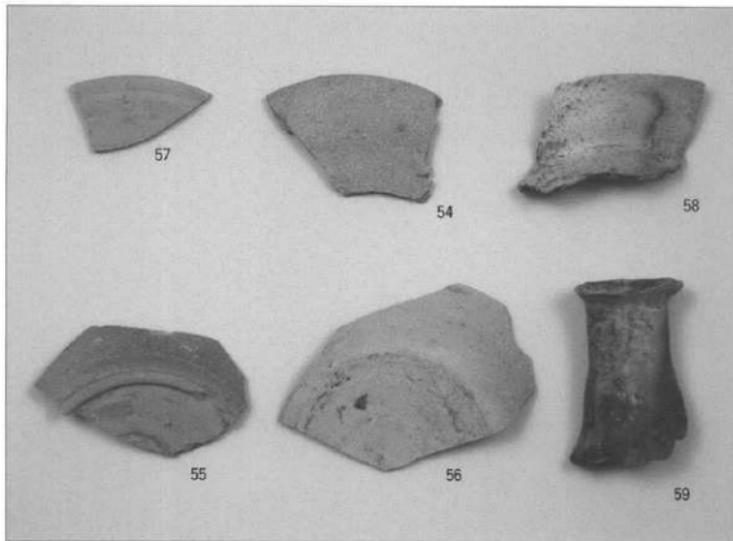
掘立柱建物（SB 4）出土土器



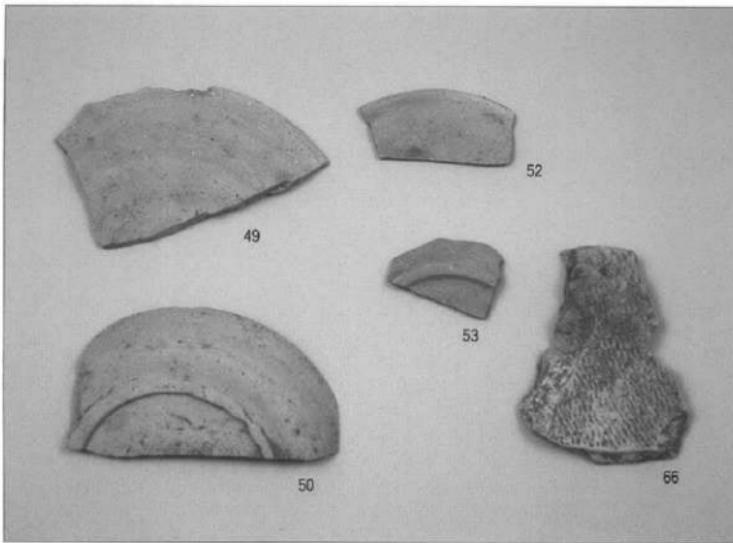
掘立柱建物（SB 6～SB 8）出土土器



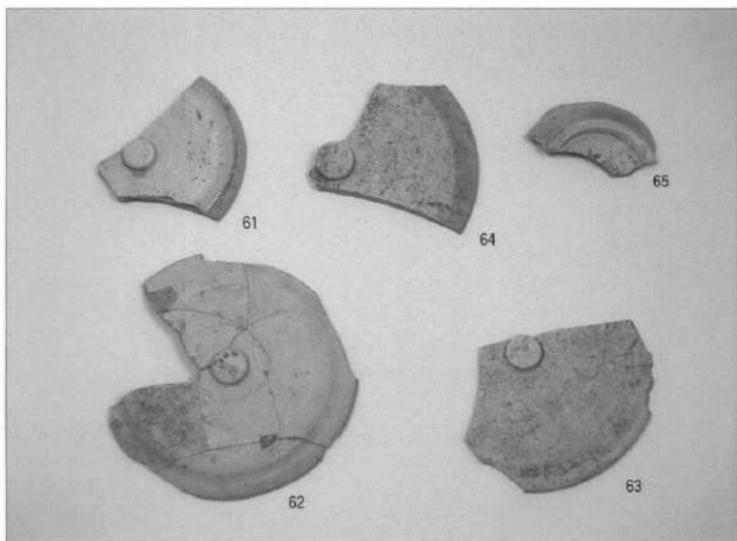
ピット出土土器



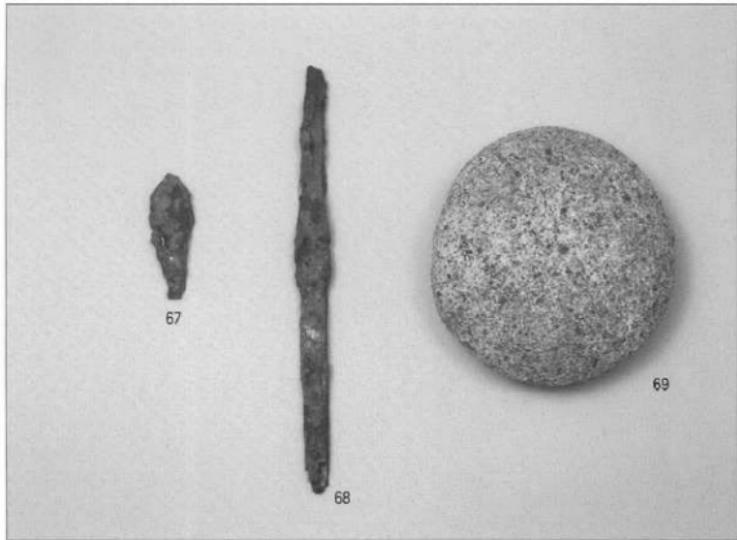
溝（SD 1～SD 3、SD 6）出土土器



ビット、試掘出土土器



包含層出土土器



掘立柱建物 (SB 1)、ピット出土鉄製品、石製品

報告書抄録

ふりがな	はったんぎりいせき2							
書名	八反切遺跡II							
副書名	工場建設用地造成工事に伴う発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	42							
編著者名	大岡由記子							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財部文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833							
発行年月日	20090331							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
八反切遺跡	彦根市 野田山 町地先	25202	053	35度 14分 29秒	136度 16分 26秒	2,780m ²	20080107 ~ 20080310	工場用地
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
八反切遺跡	集落	古墳時代 奈良時代	溝 掘立柱建物	古式土師器 須恵器 土師器 灰釉陶器 鉄製品	掘立柱建物			

彦根市埋蔵文化財調査報告第42集

八反切遺跡II

-工場建設用地造成工事に伴う発掘調査報告-

平成21年(2009年)3月発行

編集・発行:彦根市教育委員会文化財課

彦根市尾末町1番38号

TEL 0749-26-5833

印刷・製本:サンメッセ株式会社

滋賀県彦根市小泉町30番地9

TEL 0749-21-3211

SITE OF HATTANGIRI



March, 2009

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division